



星 泰三郎 (金山図書館提供)

宮城県の中に、まだ公立の図書館がなかったころ、小さな町に図書館をつくり、その図書館の館長として人々に本を読む楽しさを広めた人がいました。人々に「館長さん」と呼ばれ、みんなから慕われたその人は、星泰三郎です。

学校の教師として金山の地で働きながら、

泰三郎は、教師として働きながら、

(金山は日本一小さな町だ。子どもたちは、この中にだけとどまることなく、広い世界に活躍して社会のためにつくす人になってほしいものだ。そのために、子どもたちに進んで学ぶことを教えていくべきだ)と考えていました。泰三郎は、子どもたちに、

「日本一小さな町から巣立っても、みんなが羽ばたく世界は無限に広いのだ。」

といつも言っていました。しかし、泰三郎は子どもたちに、どう教えていけばよいのか、なかなか答えは出ませんでした。

そんなある日のこと、児童文庫の本を読んでいた少年が、目をきらきらさせながら、泰三郎に言いました。

「先生、この冒険の話の続きが読みたいです。」

泰三郎は、はっとしました。

(こんなにも、子どもたちの中に、本を読みたいという気持ちがあるのだ。今こそ、自由に本を読み、学べる

環境が必要だ。)

泰三郎は町に図書館を作ることを願い出しました。当時、図書館をどのようにづくり、どのように運営したらよいかも分からない中でしたが、泰三郎の考えに共感する多くの人の協力を得て、昭和十一年に宮城県で六番目の公立の図書館が完成しました。

「先生、これを調べたいのですが、どのように調べたらよいですか。」

「これは、自然科学の分野だから、あちらの棚だよ。」

図書館で、本の楽しさを知った子どもたちは、学ぶことがどんどん好きになりました。しかし、世の中は、戦争に向かって進んでいき、多くの卒業生が戦地に旅立っていきました。そのような中、泰三郎も転勤で金山の地を離れることになりました。

泰三郎が金山の地を離れて六年が経った昭和二十年八月十五日に終戦を迎えました。この日は、朝から暑い日でしたが、泰三郎は、庭先で一人青空を見つめていました。教え子の顔が次々うかんできましたが、その中には戦争で亡くなった卒業生もいました。



昭和11年金山図書館開館  
(金山図書館提供)  
(右から2人目が星泰三郎)

泰三郎はその後、間もなく学校の先生をやめ、生まれ故郷の金山に戻りました。泰三郎は、毎朝早くに起き

て、通りがかった人に、

「おはようございます。」

と、ていねいにあいさつをしながら、道路をきれいに掃く活動を続けました。こうして、地域のために、一生懸命働く泰三郎の姿を見た金山の人たちは、再び、金山図書館の館長として迎え入れたのです。

運営…  
人や仕組みをうまく使って、仕事を進めること。

終戦…  
太平洋戦争が終わったこと。

泰三郎は、(戦争が終わり、自由な世の中になった。今の自分にできることは何だろうか。)と考えました。そして、泰三郎は、東京に住んでいる金山町出身の人に頼み、東京で話題の本や流行っている本を送ってもらいました。本だけでなく、子どもたちの読みそうな雑誌や漫画も泰三郎の小遣いで買って入れました。そのため、図書館の中はいつも子どもたちでいっぱいでした。

「本を見せてください。」

子どもたちは、本が大好きになっていきました。泰三郎はそういう子どもたちの姿を見ながら、うれしそうにほほえむのでした。こうして、泰三郎は来る日も来る日も、地域の人のため、子どもたちのために図書館を開館し続けました。

ある寒い冬の日、図書館を訪れた人が、冷たい水で掃除をしていた泰三郎に、

「館長さん、こんな寒い日に、なぜ、冷たい水で雑巾がけをしているのですか。」

と聞きました。泰三郎は、

「このくらい何でもありませんよ。毎朝、冷水で体を拭く健康法をもう何十年もやっているよ。」

と笑って答えるのでした。泰三郎は、地域の人たちのため、図書館の本を楽しみにしている人たちのためにも、健康に気をつけながら、利用する人が気持ちよく使えるように気を配っていたのです。再び館長になって、十年以上の月日が経ってからも、泰三郎は、一人で本を入れ、片付け、修理までこなしました。本の数も一万冊以上になりました。しかし、びっしりとすき間なく並んだ本棚を見ながら泰三郎は、ため息をつきました。泰三郎も年をとり、図書館も古くなるとともに、本を収めるスペースもなくなっていったので、図書館の利用者も少しずつ減ってきていたのです。

そんなある日、思いがけないことが起こりました。これまで、金山のために働き続けた泰三郎に、東京で成功した金山町出身のお金持ちが、何と、お金を贈ってくれたのです。泰三郎はそのお金を、図書館建設のため、

町に全額寄付することにしました。そして、八年後の昭和五十二年、真っ白い壁の図書館が立派に完成したのです。

こうして、再び、図書館の仕事は忙しくなりました。日曜日には、他の地区からも子どもたちがやってきました。そのため、新刊書を見やすく机に並べておくなど休む暇などありませんでした。これまで、図書館の仕事をすべて一人でこなしてきた泰三郎でしたが、すでに八十歳を過ぎていました。気がつくとき、図書館に来ている子どもたちは泰三郎の手伝いを進んで行うようになっていました。

「ありがとうございます。」

「館長さんの役に立ててうれしいです。いつもお世話になっていっか  
ら。」

と、子どもたちは言うのでした。

泰三郎は、大晦日も元日も、毎日毎日、三十九年の間一日も休まず  
に図書館を開館し続けました。



星泰三郎の胸像

金山図書館で多くの本に出会った子どもたちは学ぶことの好きな大人へと成長し、いろいろな仕事の分野で活躍しました。

泰三郎の死後、地域の人々はその業績をたたえ、金山公民館(現在の金山まちづくりセンター)前に胸像を建てました。金山公民館を訪れる人々の中には胸像に手を合わせて拝む人がいるそうです。

星泰三郎

星泰三郎は、明治二十六(一九〇三)年、金山町(現在の丸森町金山)に生まれた。教育の道を志し、小学校長として勤務した後、図書館長として三十九年間休まずに図書館を開館し続けた。

新刊書:  
新たに発行された  
本。